

とどけ、みんなの思い ～放送委員会からお伝えします～

ー特別活動（児童会活動）での情報端末の活用ー

亀岡市立南つつじヶ丘小学校 教諭 広瀬 一弥

hirose-k@kyoto-be.ne.jp

キーワード：情報端末、協働学習、言語活動、特別活動、ニュース番組作り

1. はじめに

亀岡市立南つつじヶ丘小学校では、昨年度より児童会活動の放送委員会が、デジタルカメラで動画を撮り、PCで編集して番組作りを行ってきた。

内容は学校行事の特集や、先生や下級生へのインタビューなどである。できあがった番組は校内のファイルサーバで共有し、好きなときに各教室の電子黒板で閲覧している。今年度も放送委員会に所属する児童が番組づくりを計画し、年間の様々な行事を取材→編集→配信すると決めた。

2学期の活動では、11月に開催される学習発表会を取材対象として、各学年の取組の様子を番組にすることを考えた。そこで、今回初めて、1人1台の情報端末を活用し、取材から編集まで行うこととした。

最後に学習発表会当日も各学年の演奏を収録した。



写真1 練習風景を取材している様子

2. 実践の概要

(1) 実施領域・対象児童

特別活動（児童会活動）

放送委員会に所属する5・6年生15名

(2) 実施時期

平成23年10月から11月（約10日間）

委員会活動の時間（1時間）及び休み時間

(3) 取組の計画

- ・各学年の練習の様子を取材
- ・児童や指導者（担任）へのインタビュー
- ・取材に並行して番組の仮編集
- ・本番の収録
- ・練習についてと本番の映像を本編集
- ・校内LANを通じて各教室に配信

(4) 使用機器・ソフトウェア

- ・情報端末 iPad2（以下 iPad）、電子黒板、
- ・iMovie（映像編集ソフト）



写真2 学習発表会（本番）の収録

3. 実践の様子

(1) 取材活動について

写真1は、休み時間に学年の練習を取材している様子である。委員会活動での取組であり、授業中は各学級での学習があるため活動は休み時間に限られた。

児童は、1台のiPadを手に自分の取材担当学年が体育館で練習をする時間を調べ、取材をしていた。体育館では、映像の大きさや角度を考えながら、何度も撮り直すことができた。撮影後はすぐに画面上で撮った映像を再生し確認していた。

また、担当の先生（学級担任）にインタビューをすることを考えた児童がいた。その際は、必ずアポイントメントをとってから取材に臨むように指導した。

(2) 編集活動について

編集は取材活動と並行して行った。iPadは取材場所でも教室でもどこでも編集でき、PCでの編集に比べて編集時間が短縮できた。（写真3）

編集作業は通常、撮影後すべての撮影映像を見て、使う映像を選択し、それをつなぎ合わせて行う。しかし今回は、1端末で撮影と編集をしているため撮影したものをもとに編集ソフトに入れ構成を確かめながら、撮影に戻ることができる。実際編集場面で「何秒の映像がほしい」と考え撮り直している児童もいた。

また、インタビュー映像の音声の大きさが足りないことに気付いた児童は、アフレコを思い付き、ナレーションを付け加えることができた。（写真4）

本番の収録も終え、構成がある程度仕上がった時点で、タイトルを挿入していった。映像を補うという視点で、

短い言葉で的確に伝えることができる言葉を吟味するよう指導した。(写真4)



写真3 編集を協働で行っている様子



写真4 タイトルの挿入（実際の作品から）

（3）公開（配信）

公開は、出来上がった映像を校内LAN内のウェブサーバに入れ、各教室の電子黒板で閲覧できるようにした。朝の会や給食中など学級の実態に合わせて、好きな時に観てもらえるようにした。(写真5)

各学級では、映像をもとに話し合い活動を行ってもらった。先輩の素晴らしいパフォーマンスにあこがれる低学年の話し合い。自分たちの成長を振り返る中学年と、発達段階に合わせた話し合いができた。特に高学年では、5年生国語科で学習した、自らのニュース番組作りを想起し、効果的な編集や、発信者の意図を話し合うクラスもあった。

4. 実践を終えて

（1）個別作品作りから協働作品作りへ

1人1台の端末を用意し1人1作品をつくることを前提に実践をスタートした。15人を7つのグループ（6学年＋特別支援学級）に分け、撮影は個人で行っていった。撮影と編集を繰り返しながら、映像の検討を進めていると（写真3）のように撮った映像をグループで検討する様子が自然と生まれてきた。やがて児



写真5 教室で番組を視聴している様子

童から、グループで一つの作品を作りたいという声が出て、最終的には5つのグループがグループ（協働）で1つの作品を作ることとなった。「より良い作品を全校に届けよう」という思いがあふれた結果である。

異なる学年の児童がグループを組み、話し合いながらよりよい方向に議論し作品を作っていくことになった。異年齢の集団で自主的に活動を進めることは特別活動のねらいの一つでもあり、図らずも児童自身がその方向に実践を修正することとなった。

（2）国語科での学習を他の教科・領域で生かす

前述のように、本校では5年生の国語でニュース番組作りを行う。映像の並べ方やニュース原稿の書き方などを国語科として学ぶ。それまでも4年生では、インタビューの仕方、3年生では映像を使ったプレゼンテーションと、系統的に番組作りにつながることを学習してきた。そのような活動で習得した力を、今回の委員会活動での番組作りで生かすことができた。

（3）映像制作と言語活動

製作する中で、児童はインタビューやナレーション、できあがった作品についての話し合いなど様々な言語活動を行った。どのようにしたらもっと伝わるか。分かりやすく伝えるためにはどのような工夫ができるか。試行錯誤を通して、言語力を高めることができた。

また、映像を視聴する児童にとっても、同じ学校の児童が作った作品から多くのことを感じ、「伝えたいこと」を読み取ることができた。映像作りを通して「作り手」「受け手」ともに、今児童に必要な言語力を育むことができたと考える。

5. ICTで全校がつながる

放送委員会が作った番組は、練習の真剣なまなざしを届け、全校をつなげてくれた。iPadでの作品作りは、協働学習を後押ししてくれた。

今後も顔と顔を合わせることのできるICTの活用を模索していきたい。そのキーとなるのは「協働学習」であることを、本実践を通して確信した。